

2021. 8. 15 (日) マタイ26:47~50

26:47 イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二人の一人のユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした大勢の群衆も一緒であった。

26:48 イエスを裏切ろうとしていた者は彼らと合図を決め、「私が口づけをするのが、その人だ。その人を捕まえるのだ」と言っておいた。

26:49 それで彼はすぐにイエスに近づき、「先生、こんばんは」と言って口づけした。

26:50 イエスは彼に「友よ、あなたがしようとしていることをしなさい」と言われた。そのとき人々は近寄り、イエスに手をかけて捕らえた。

<説教>

主イエス・キリストは、罪人である私たちのために、その罪無き身に私たちの数え切れない罪を負われて私たちの代わりに十字架につけられて死なれようとしていました。

そのイエスのご自分が負われる罪に対する天の父なる神の怒り、さばきの故に、そのそのたましいに〈死ぬほど〉の〈悲しみ〉〈もだえ〉、苦しみをゲツセマネで既にお受けになられたのでした。

イエスは汗が血のしずくのように地に落ちるほど苦しみもだえて切に祈られ（ルカ22:44）、ついに「あなたのみこころがなりますように」と父の御意思（みこころ）に完全にお従いになる祈りをお捧げになりました。

その信仰の従順の祈りのうちにイエスのご自分のたましいにお受けになった〈死ぬほど〉の〈悲しみ〉〈もだえ〉、苦しみを耐え忍ばれ、それに打ち勝たれました。

そして父の御子イエス（地上での人間としてのイエス）に対する最終的なみこころである十字架（と三日目のよみがえり）に向かって祈りから立ち上がられ、眠っていた弟子たちのところに來られて言われました。

「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されます。立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」（マタイ 26:45,46）

「時が来ました」、つまり人の子であるイエスが罪人たちの手に渡される〈時〉が来たときイエスは言われましたが、それは決して「時間切れ」とか所謂「年貢の納め時」というような諦めの、敗北の言葉ではありません。

正反対に、それは父なる神が御子イエスに対してお定めになった〈みこころ〉の〈時〉が来たということであり、その父への完全な信仰の従順をお捧げになったお方、父の「時」を知るお方、父がお定めになった「時」を喜んで迎えるべく〈さあ、行こう〉という勝利者であるお方イエスの喜びに満ちた言葉でした。

さてそのお言葉を〈イエスがまだ話しておられるうちに〉、イエスがお話しになったとおりに、〈見よ、十二人の一人のユダがやって来〉ました。(47)

更に〈祭司長たちや民の長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした大勢の群衆も一緒で〉した。(47)

〈祭司長たち〉にイエスを引き渡す取引をしたユダ（14-16）は過越の食事の途中で退席した（ヨハネ 13:30）後、〈祭司長たちや民の長老たち〉のところへ行ったのでしょう。

彼らは〈剣や棒を手にした大勢の群衆〉を差し向け（派遣し）てユダに同行させました（ルカ 22:52 によれば祭司長、民の長老たち自身も一緒に行きました）。

ヨハネ 18:3 には〈ユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやパリサイ人たちから送られた下役たちを連れ、明かりとたいまつと武器を持って、そこにやって来た〉とあります。

それによるなら〈剣や棒を手にした大勢の群衆〉とは一般の人と言うよりも特に〈剣や棒〉という〈武器〉を持った〈一隊の兵士〉（その数おそらく数百人）と役人たちということになります。

〈一隊の兵士〉とは明らかにエルサレムにいたローマ帝国の軍隊の中の一隊です（普段からエルサレムにはローマ軍が駐留していたでしょうが、過越などユダヤ人の祭りのときには特に民が反ローマの騒動を起こさないように、もし騒動が起きたときには排除鎮圧すべく見張っていたということです）

これも〈祭司長たちや民の長老たち〉即ちユダヤ人の最高議会（サンヘドリン）が総督ピラト（27 章）に要請して派遣してもらったのでしょう。

〈イエスを裏切ろうとしていた者〉ユダは〈彼らと合図を決め、「私が口づけをするのが、その人だ。その人を捕まえるのだ」と言っておいた〉（48）のでした。

それだけ用意を周到にしてユダは〈すぐにイエスに近づき、「先生、こんばんは」と言っておいた〉（49）のです。

言うまでもなく〈口づけ〉は愛、信頼、喜びなどのしるしですがユダはそれを裏切りの手段として用いました（だからこそ裏切りだとも言えます）。

〈口づけした〉（49）は「何度も繰り返し口づけする」という言葉です（ルカ 7:45、15:20 欄外注、使徒 20:37）。

そうすることで、今回だけはイエスを間違いなく捕まえ〈しっかりと引いて行く〉（マルコ 14:44）ようにしなければなりません（とうのは、イエスはこれまでも何度か不思議な方法で人々の手にかかるのを免れてこられたからです（ルカ 4:30、ヨハネ 8:59、10:39））。

このような裏切り者、偽善者ユダに対してイエスは〈「友よ、あなたがしようとしていることをしなさい」と言われた〉（50）のです。

ユダが何度も口づけをしたからでしょうか、マタイが記した（聞き取れた？）イエスの言葉（「あなたがしようとしていることをしなさい」）は短く、いささか不明瞭でした（直訳的には「何のために来たのですか」（新改訳三版、口語訳））。

ルカは、イエスに口づけしようとして近づいたユダに「ユダ、あなたは口づけで人の子を裏切るのか。」とイエスが言われたと記しています。（ルカ 22:48）

それで、ご自分を裏切る者に対して「友よ」と呼びかけられたことも含めて、イエスはこのときユダに「あなたは何ということをしようとしているのか」「自分が犯そうとしている罪を認めなさい」「その罪の恐ろしさに気づきなさい」「そして悔い改めなさい」と、その良心に訴えかけられたのです。

しかしそんなあわれみ深いイエスのみことばに対してユダは一言も答えませんでした。

そしてユダが先頭に立って（ルカ 22:47）引き連れて来た〈人々は近寄り、イエスに手をかけて捕らえた〉（50）のでした。

このようにイエスは〈まるで強盗〉（55）のような犯罪者、囚人として〈捕らえ〉られた

のですが、それは実は本当の罪人、犯罪者、罪の囚人である私たちの罪をすべてその身に負われたがためでした。

ヨハネ 18:4-8 によれば、イエスは自ら威厳をもって名乗り出られ、弟子たちを去らせるように言っておられます。

それもすべてイエスがご自分の父なる神のみこころに喜んで従い、自分から人々の手に引き渡され、私たちの罪のために十字架につけられるためでした。

ですから私たちは思い上がりの心でユダを見下すのではなく、自分自身の罪をこそ認めてイエスのあわれみと助けをひたすら求めるほかないのです。